# 科学的形而上学はいかに可能か

森田紘平（Kohei Morita）・北村直彰（Naoaki Kitamura）

神戸大学・島根大学

科学から形而上学を導く科学的形而上学はどのような営みなのだろうか．そもそも科学的形而上学は可能なのか. 形而上学は科学に基づくべきであるという立場に立つ科学的形而上学の研究者たちは，いわゆる分析形而上学に対して，そのような営みが無意味であると指摘することが多い．確かに，現代科学の知見を十分に考慮せずに形而上学が可能なのかという指摘は一定の説得力を持つだろう．

これに対して，「科学的知見を十分に反映していないという理由で分析形而上学の可能性が否定されるのであれば, 同様の理由で現在の科学的形而上学の意義も否定されることになる」というマッケンジーによる批判がある．現代の科学理論も究極的なものではない以上，現状の理論が偽であるという可能性は非常に高い．その偽であるような科学理論を通じて得られた形而上学にどのような意義があるのかというのが彼女の批判の骨子である．マッケンジーはこの批判に対する応答の可能性として，（１）科学的形而上学は，真理に向かって徐々に進歩しているという応答と，（２）究極的な理論以前の科学的形而上学は非基礎的な形而上学的真理を明らかにしているという応答を検討している．しかし，これらの応答はどちらも失敗しているとマッケンジーは主張する．まず，（１）「近似的に真」という概念（およびそれに基づく「進歩」という考え）が形而上学的理論に関しては意味をなさない．また，（２）基礎的な真理と非基礎的な真理との間を繋ぐような形而上学的決定関係を, 究極的な科学理論に基づく科学的形而上学と現在の科学理論に基づく科学的形而上学との間に想定することは出来ない. このようにして，マッケンジーは科学的形而上学が一般に大きな課題を抱えていると指摘する．

このマッケンジーの指摘は，「偽である理論から，真なる形而上学は導けない」という主張が背景にあると言っていいだろう．しかし，偽である理論やモデルから，実在論的な含意を導くことは可能であるという指摘もある．例えば，有効実在論は，有効モデルや有効場理論のような明確に偽であるモデルに対する実在論が可能であるとする立場である．また，存在論的創発の議論においても，偽であるモデルから真なる実在論的な主張が導かれているように見える．そこで，本発表では，有効実在論や存在論的創発についての議論に依拠しつつ，偽なる理論・モデルから真なる形而上学的主張が導けるということ示す. このことを通じて, 科学的形而上学が可能であることを明らかにする．